

Manly Love についての一考察

—ホイットマン「私はルイジアナでオークの木を見た」—

小沢 和光

[キーワード：① 詩人としてのホイットマン ② Myself
③ 生身のホイットマン ④ manly love ⑤ 渴望]

1. はじめに

ライブ・オーク (Live-Oak) とは、特にアメリカ南東部に生育する檜属の常緑樹である。高く、また広く枝葉を繁らせる。

“I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing”

I saw in Louisiana a live-oak growing,

All alone stood it and the moss hung down from the branches,

Without any companion it grew there uttering joyous leaves of dark green,

And its look, rude, unbending, lusty, made me think of myself,

But I wonder'd how it could utter joyous leaves standing alone there without
its friend near, for I knew I could not,

And I broke off a twig with a certain number of leaves upon it, and twined
around it a little moss,

And brought it away, and I have placed it in sight in my room,

It is not needed to remind me as of my own dear friends,

(For I believe lately I think of little else than of them,)

Yet it remains to me a curious token, it makes me think of manly love;
For all that, and though the live-oak glistens there in Louisiana solitary in a
wide flat space,
Uttering joyous leaves all its life without a friend a lover near,
I know very well I could not. (1860年初出)¹⁾

1848年、『草の葉』*Leaves of Grass* 初版²⁾ の出る7年前、ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman) がまだ20代の新聞記者であった頃、ニューオーリンズの地元紙で働く機会を得た。彼は15歳になる弟を連れて、ニューヨークからアメリカ南部へと出発した。2人は列車でまずボルチモアへ向かい、そこから列車と馬車を乗り継ぎアレゲーニー山脈を越えてホイーリングに出た。それから今度はボートでシンシナティへと下り、ルイヴィル、ケアロ等を過ぎる。蒸気船セント・クラウド (St. Cloud) 号に乗った兄弟はミシシッピ川を下り、やつのことでニューオーリンズにたどり着く。アメリカ大陸を北から南へ、2400マイルの行程は、2週間もかかった。だが、仕事上の問題と、気候が暑くなるにつれ、弟が黄熱病に感染する恐れも生じ、滞在は約3ヶ月と短かった³⁾。19世紀のアメリカ人にとって、アメリカ大陸を北から南へと移動することは、異国への旅のようなものであったのだろう。

ホイットマン自身の言葉を引こう。色彩感のある文章から、ニューオーリンズの空気が生々しく伝わってくる。

日曜の朝のフレンチ・マーケットに通ったものだ。ビスケット付きのコーヒーでの朝食がたまらなくうまかった。クレオールのが、朝日に輝く銅製ケトルからたっぷり注いでくれた⁴⁾。

“I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing” (以下、ルイジアナ詩と表記) を取り巻く批評史を振り返ると、ニューオーリンズでホイットマンがク

レオール⁵⁾ 女性と関係し、それが後の詩人誕生に大きく関与したとの見解が、20世紀初頭に見られる。最初のホイットマン伝記作者であるビンズ (Binns) は、1905年の著作において「おそらくは、南部の上流婦人と親密な間柄になり、その女性がホイットマンの子を、何人かもうけたのだろう」⁶⁾ と記し、詩人の私生児という謎をほのめかしている。

その50年後、『草の葉』初版から丁度100年目に当るが、ウィリアムズ (William Carlos Williams) も次のように書いている。

若い頃ニューオーリンズで美しい混血女性と恋に落ちたが叶わなかったらしい。その失望をばねに、詩を書いて抵抗する人生が始まったのはありうることだ。自由詩は偉大な思いつきだったのだ⁷⁾。

ホイットマンのいわゆるロマンス神話は、多くの研究者によって次第に否定されるようになる⁸⁾。その代わりというか、ホイットマンを同性愛⁹⁾の詩人とみなす傾向が、20世紀中葉以降、強まってくる。1955年、“Live Oak with Moss”と題された12篇の連作詩の原稿が、バワーズ (Bowers) によって発見され、ホイットマンと男性との関係が取り沙汰されるようになる¹⁰⁾。この連作詩にルイジアナ詩も含まれ、manly love という言葉も、同性愛の文脈で解釈される。98年、マーティン (Martin) は *The Homosexual Tradition in American Poetry* の増補版を出す。著者によれば、79年の初版は性的解放の時代思潮に沿うものだったが、時代の進行につれ、増補の必要に迫られ、ホイットマン以来の「同性愛的伝統」の現在が考察されている¹¹⁾。

論者は決してホイットマンの同性愛を否定はしない。詩人や芸術家に同性愛傾向を持つ者が多い事実を見ると、むしろ、創造力と同性愛との根源的なつながりを考えてみたくもなる¹²⁾。

しかし、ルイジアナ詩の manly love という言葉を、一面的に同性愛の表現として片付けてよいものだろうか。ホイットマンの表現しようとする

る愛とは、一つの形に収まってしまうものなのだろうか。

ホイットマンの没年1892年（明治25年）に、夏目漱石は、この *manly love* という言葉を取り上げ「只此一新熟語を敷衍すれば“Calamus”の全篇を掩ふに足り而して“Calamus”を敷衍すれば又全集を掩ふに足る位なる故此一語中々軽卒に看過すべからず」と述べている¹³⁾。これに関連して、江藤淳は「漱石がホイットマンに見たものは、「哲学雑誌」に書いた論文に掲げられたナショナリズム、平等主義云々などではなくて、むしろあの“*manly love of comrade*”の影にひそむ深々とした孤独、そしてそこから溢れ出る無言の音楽ではなかったであろうか」と書いている¹⁴⁾。

なぜ、*manly love* から、愛とは単純に訳せないような感情が生じるのだろうか。本論は、この謎を追いかけて、ホイットマンの本質に迫ろうとする試みである。

2. オークの木に想う *myself* と “*Song of Myself*” : 「詩人」の理想

枝から苔の垂れているこのオークの木は、文字通り一本だけで立っている。広大なルイジアナの空間にそびえ、周囲に同じような木の無いさまを「連れも無く」(*Without any companion*)と表現する。語源に「パンを共にする」とある言葉を、オークの木の形容に用いる。詩人は一本の木の立ち姿に、連れの無い人間の姿を重ねるのか。しかし、そこには孤独の寂しさは無い。空間に屹立し、むしろ英雄的な風格すら漂わせる。

何者にも干渉されず自由に枝葉を生い茂らせている。冒頭の *growing* は良いとして、濃い緑の葉を生い茂らせるという意味で *uttering* とは、どういうことなのだろう。先の「連れ」と同様、植物の形容としては、やや奇異に響く。

動詞 *utter* の語源的な意味は「外に出す」であり、確かに枝葉を木の

「外に出す」ことに違いはないが、普通この語は、声や言葉を「外に出す」、発言するという意味で用いられる。声は人間のそれに限らず、動物の鳴き声等も含むが、言葉で考えを述べるという意味では、主に人間の言語活動に充てられる。

葉を繁らせるオークを、growing ではなく敢えて uttering . . . leaves と表現するホイットマンは、この力強く屹立する大木に、人間の姿を重ねている。木の枝から広大な空間へと生い茂る葉は、人間が楽しげに発する声であり、言の葉のイメージに連なる。短い詩のささやかな一節にも、ホイットマンの詩想の核心がほの見える¹⁵⁾。

草を両手につかんだ子どもがやってきて、「草って何？」と詩人に問いかける「私自身の歌」“Song of Myself” (1855年初出) の一節もまた、詩想の核心と言えよう。

A child said *What is the grass?* fetching it to me with full hands;
How could I answer the child? I do not know what it is any more than he.
(30)

詩人は、子どものあまりに根本的な問いに不意を突かれながらも、やり過ごすことなく、一つ一つ想念を繰り広げてゆく。そうして草の葉にまつわる物思いは、いつしか人間の発する声、言葉にたどり着く。

O I perceive after all so many uttering tongues,
And I perceive they do not come from the roofs of mouths for nothing. (31)

「私自身の歌」の一節とルイジアナ詩を、utter という語を結び目につなげてみると、『草 (Grass) の葉 (Leaves)』と「人間の言葉」とのアナロジーが見えてくるようだ。

一枚一枚の「葉」が言葉であれば、それは「舌」(tongue) ともなる。言われてみれば、形状が似ていなくも無い。ホイットマンは、一枚の葉に、舌を直観する。このイメージをふくらませるために、さらに「私自身の歌」から引用してみよう。その冒頭部分の初稿、まだ題が付される以前の草稿である。

I am your voice—It was tied in you—In me it begins to talk.
I celebrate myself to celebrate every man and woman alive;
I loosen the tongue that was tied in them,
It begins to talk out of my mouth.¹⁶⁾

あらゆる男女の内に固く閉じていた舌が、詩人によってゆるめられ、詩人の口から声となって外へ出てゆく。詩人の口から無数の人間の言葉が出てくる。それが丁度、木から無数に葉が伸び出てゆくイメージに重なる。

ルイジアナ詩におけるオークの大木は、ホイットマンの大きな主題を象徴していると言える。なぜなら、広大な空間に聳え立つこの大木を見て、詩人は「私自身」(myself) を想うのだ。ホイットマンにとって「私自身」とは単なる再帰代名詞ではない。それは無数の人間の言葉を発しうる程に、大きなものである。

オークの中でも特に live-oak は、アメリカ南部において強さを象徴するものとされる。三つの形容詞「荒々しく」(rude)、「確固として」(unbending)、「精力的な」(lusty) で描かれる大木のイメージは、「私自身の歌」を通じて拡大される姿にも重なる。歌の中ほどで、詩人は高らかに自分の名前を宣言し、「私自身」を宣揚する。

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,
Turbulent, fleshy, sensual, eating, drinking and breeding, (45)

ファーストネームを Walter から Walt へと変えることによって、詩人となる¹⁷⁾。ここで「ウォルト・ホイットマン」と命名された「私自身」は、彼方の宇宙と地元のマンハッタンとの区別が付かなくなってしまうような、まさに無限大の空間を包む程に、大きな存在である。ここに描かれる「私自身」は、力強く歌う「詩人」の大きな姿である。初版に付された力強い自画像をも連想させる、ペルソナとして拡大してゆこうとする理想像である。

ルイジアナの広大な空間に立つオークの木に投影される「私自身」もまた、堂々と立とうとする大きな理想像といえる¹⁸⁾。

3. 小枝に想う manly love

しかし、その直後、詩人は不図、こんな言葉を吐いてしまう。それは弱音とも取れる吐露である。

But I wonder'd how it could utter joyous leaves standing alone there without
its friend near, for I knew I could not, (108)

堂々と聳え立つオークの大木から「私自身」を連想する詩行の直後に、「でも…私には出来ない」ともらす。この語調の変化から、「私自身」とは別のホイットマンが感じられる。つまり、オークの大木から連想された「私自身」とは理想化された観念であり、その「私自身」を遠くに感じる「私」が実在するのである。

「私自身」と「私」との隔たりは、オークの大木と、そこから切り取った「小枝」(a twig) との差異に端的に現れている。「私」はその小さな木片を、大木を「奇妙にも思い出させるもの」(a curious token) として、ルイジアナの大平原から持ち帰り、独居する部屋の中の、目に付く場所に置く。何と叙情的な、この「私」であろうか。これがあの「乱雑で、

肉付きよく、好色な、飲み食い、生み増やす」「ウォルト・ホイットマン」なのだろうか。

「小枝を私の部屋に置いた」という詩行から、時制が変化している点は注目すべきだ。ルイジアナの大平原で見たオークの大木から「私自身」を考えさせられた、詩の前半の過去形が、この現在完了形 (I have placed it) をはさんで詩の後半はすべて、現在形になっている。

オークの大木が過去の空間に遠のいていく。記憶の中の空間に立つオークの木が、あたかも抽象化されるのと対照的に、その小枝が、読み手の前に現れる。

つまり、過去から現在への時制の変化によって、この詩における場が「空間」から「場所」へと転換される。焦点の転換によって、読み手の眼前に小枝がくっきりと浮き上がってくる。小枝を置くという意味で、動詞 place を用いる。オークの大木の立つ space には無いリアリティーが、この小枝には感じられる。

4. 過去から現在へ、空間から場所へ

ルイジアナ詩における時間と空間を、ホイットマン詩の中で manly love という言葉が用いられている他の2編のそれと比較してみよう。ほぼ同時期に書かれている“Starting from Paumanok” (1856年初出) と“For You O Democracy” (1860年初出) である。

And I will report all heroism from an American point of view.

I will sing the song of companionship,

I will show what alone must finally compact these,

I believe these are to found their own ideal of manly love, indicating it in me,

I will therefore let flame from me the burning fires that were threatening to
consume me,

I will lift what has too long kept down those smouldering fires,
I will give them complete abandonment,
I will write the evangel-poem of comrades and of love,
For who but I should understand love with all its sorrow and joy?
And who but I should be the poet of comrades? (18)

「アメリカ人の視点から」(from an American point of view) 出発し、「民主主義」(Democracy) を作り上げようと、I will と始まる行がさらに連呼される。

Come, I will make the continent indissoluble,
I will make the most splendid race the sun ever shone upon,
I will make divine magnetic lands,
 With the love of comrades,
 With the life-long love of comrades.
I will plant companionship thick as trees along all the rivers of America, and
 along the shores of the great lakes, and all over the prairies,
I will make inseparable cities with their arms about each other's necks,
 By the love of comrades,
 By the manly love of comrades.
For you these from me, O Democracy, to serve you ma femme!
For you, for you I am trilling these songs. (100-101)

ホイットマンが『草の葉』に何らかの理想を託していることは間違いない。詩人として理想を掲げ、その視線が未来に向かっていくさまが、この2編から明らかとなる。I will と、執拗なまでに繰り返されることによって、単なる未来時制では表現しきれない、強烈な意志が伝わってくるようでもある。この2編からは、詩人としてのホイットマンの自信

が感じられる。それは、理想として掲げる未来が、現在と同一線上に並んでいるためと考えられる。なぜならば、未来形で通されてきた詩行を締めくくる、詩人としての決意を表明する行は現在形となっている。

この2編における空間は、端的に言えば、詩人の理想としての広大なアメリカの空間である。“For You O Democracy”に明らかなように、詩人の用語「アメリカ」は単なる国家の名称ではない。あらゆるアメリカの川を通る先は、大文字で表記される「民主主義」に通じる。あらゆる空間を併呑し、統一された空間には、宇宙的な広がりがある。“Starting from Paumanok”では、manly loveに「理想」(ideal)という語が冠されているが、まさにこれら2編では、理想の実現を信じて疑わない詩人が、未来に直結する歌声を響かせる。このような文脈での manly love とは、詩人の掲げる大文字の「民主主義」を支える観念であり、広大な人類愛とも言える理念であり、神聖なるものに向かう理想なのだ。あらゆる対象に向かって発信するという意味で the manly love (“For You O Democracy”)と総称される。言わば、大文字の愛だ。

ルイジアナ詩における時間と空間を見てみよう。

先の2編で I will と繰り出されていたのとは対照的に、この詩では、その前半に過去形が用いられている。ルイジアナでオークの大木を見て「私自身」を想う、その時空は過去である。

ルイジアナ詩には、追憶の気配がある。それは過去時制のみによるものではない。詩の中ほど、オークの小枝をニューヨークの部屋に置く所の現在完了形を挟んで、後半が現在形に切り替わっている。追憶の響きは、時制の転換による効果なのだ。

オークの大木が過去の時空に閉じていくのに、まるで反比例するように、その小枝が「今、ここ」に浮上する。それはホイットマンが、都市の部屋からルイジアナを回想し夢想する「現在」であると同時に、詩を読む者の「今、ここ」にも通じる。つまり、この詩では、時制の変

化によって、オークの太木が遠景に退くと同時に、読み手の眼前にオークの小枝が浮き上がってくるのだ。このようなリアリティーが、先の2編にあったろうか。ルイジアナ詩を、先の2編と同じ次元で読むわけにはいかない。特に最後で繰り返される一行 (I know very well I could not) など、それは理想の表明とは程遠いのだから。

未来に直結する「空間」から理想を歌う文脈での the manly love と、過去を引きずる「場所」で想う manly love とは、言葉は同じでも違う何かなのである。言い換えれば、未来に直結する理想を歌う詩人の the manly love が空間的な広がりをもっているのに対して、過去を引きずるホイットマンが「今、ここ」で想う manly love からは、何か彼の体温のようなもの、小枝を見つめ、座り続けるその「場所」が感じられる。

ルイジアナ詩の中で、ホイットマンはどこにいるのだろうか。広大なルイジアナの平原で、力強い「私自身」の姿を重ねたのは遠い過去である。彼は今、ニューヨークの部屋にいる。ルイジアナのあのオークは、孤独にもかかわらず、力強く歌っていた。詩人として、あのように力強く歌いたかった。しかし、追憶の影を引きずる「今、ここ」のホイットマンはどうだろうか。ルイジアナから時間的にも空間的にも遠く隔たった都市の部屋で、オークの小枝を見つめ、manly love を想う彼はただ、孤独なのである。

この「場所」に置かれた小枝に、ホイットマンは manly love を想う (it makes me think of manly love)。広大なルイジアナの空間に立つオークの太木に「私自身」を想った一節 (its look . . . made me think of myself) と微妙に響きあう。

ホイットマンにとって「私自身」とは、時空を越える存在ではなかったか。「アメリカ人の視点から」と “Starting from Paumanok” で言う時、それは「全て」を愛そうとする「詩人」の自負に満ちたものではなかったか。

5. 生身のホイットマンの渴望

オークの大木に重ねられる「私自身」が、全ての対象を愛する「詩人」としての理想の姿であるのに対し、オークの小枝を見つめながら想う manly love とは、生身の人間の感情である。

ルイジアナ詩は、大きな理想とは異質な、ささやかな想いを表現している。理想がパブリックな声明であるならば、この詩からはプライベートな小声が漏れ聴こえるのだ。ホイットマンの独り言のような。

孤独であることが、manly love に託された想いに、ある種の熱を加えているのかもしれない。この熱が、ホイットマンの同性愛に由来するとの見解も確かにある。

しかし、“Starting from Paumanok” と “For You O Democracy” に読み取れたような理想の詩人「ウォルト・ホイットマン」と、こうしたペルソナを外した彼自身との葛藤という見立ての方が、よりその本質に迫りうるのではないか。なぜなら、ホイットマンがいわゆる同性愛者だとしても、彼はそうしたプライベートな部分を含みつつも、なおパブリックな詩人であろうとし続け、『草の葉』の完成を目指したのだから。

manly love とは果たしてどのような日本語になるのだろう。manly love とは、ルイジアナ詩を含むカラムス詩篇を通底する主題である。この詩篇全体で詩人は男性への想いを表現しており、それは同性愛の感情とも言えるのは確かだ。「男らしい愛」という日本語を仮に充てられようが、そこにはかなりの振幅があるだろう。

“Starting from Paumanok” や “For You O Democracy” における manly love は、全てのアメリカ人に向けて力強く呼びかける「詩人」の「男らしい愛」である。「詩人」としての「アメリカ」とは、一国家の名称を超え、世界に広がり、宇宙にまで拡大する可能性を秘める。このように遠大なヴィジョンが manly love に託されている。確かに、ルイジアナ詩における manly love にも同様の展望があり、オークの大木は「民主主

義」を支える棟木^{むなぎ}と言えるかもしれない¹⁹⁾。

にもかかわらず、ルイジアナ詩では、大木を見上げ「私自身」を想った「空間」と、小枝を見つめ、manly love を想う「場所」とは遠く隔たっている。「私自身」と「私」との間に隔たりがある。つまり、「詩人」としての理想の影に、人間としての不安がある。大木を思い出させるといっても、その小枝は、もはやかつての大木ではない。そこに想う manly love には、「詩人」から「アメリカ」へ呼びかける力強さは無い。隣の誰かからの声を待っているかのような、沈黙した男の想いが部屋にこもる。それは果たして「男らしい愛」と言えるのだろうか。

「詩人」として、全てのアメリカを愛したい。しかし人間として、一人の「友」がいなければ「私には出来ない」(I know very well I could not)。ルイジアナ詩から、ホイットマンのこうした葛藤が感じられる。また、ホイットマンはこの詩を書いた後も、生涯、言葉を書き続け、『草の葉』の完成を目指したわけで、manly love という「一語」の根源には、彼の理想や葛藤と同時に、渴望もあるのかもしれない。

6. おわりに

本論では、ホイットマン詩の中でも特異なルイジアナ詩に焦点を当て、「詩人」として公にされる言葉の中に混じる、生身の「私」の声を聴き取ろうとした。彼にとって、詩の言葉とは何だったのか、さらに考えるべき問題であろう。

30代で「詩人」として立ち、「詩人」であり続けようとする過程で、ホイットマンは言葉の限界を感じる時もあったかもしれない。ルイジアナ詩以降、manly love という言葉が詩に用いられることは無かったのである。それでもなお、ホイットマンは辛抱強く『草の葉』の完成に一生を賭けた。manly love という言葉に託された彼の心は、『草の葉』の様々な言葉に浸透していよう。だが、70に至らんとする最晩年のホイッ

トマンの語りは何を問うているのだろう。

私の本当に触れたかったものに触れた詩人はいない。シェイクスピアやミルトン、テニソンやロングフェローでさえ、渴望という核心において群集に共感し、触れる一歩手前で、触れていない²⁰⁾。

この未完の想いに、ルイジアナの広大な空間から遠く隔たった都市の一隅で想う *manly love* を重ねることは出来まいか。人間そのものに触れたいという「渴望」(desire)を抱く一人の男の言葉として。

注

- 1) Whitman (2002): 108. (以下、引用末尾の括弧内でページ数を示す。)
- 2) 1855年7月4日のアメリカ独立記念日に自費出版される。
- 3) New Orleans 行きの行程等は Allen 91-100、Reynolds 120-22、Zweig 58-78 を参照。
- 4) “One of my choice amusements during my stay in New Orleans was going down to the old French Market, especially of a Sunday morning. . . I remember I nearly always on these occasions got a large cup of delicious coffee with a biscuit, for my breakfast, from the immense shining copper kettle of a great Creole mulatto woman . . .” (“New Orleans in 1848” in Whitman (1964): 606).
- 5) 「クレオール」(creole) とは Kaplan によれば、「土着の人」を意味する。19世紀中葉の当地に滞在していたジャーナリストの証言を引き、Binns が「フランス系上流白人」と解釈している事に注意を促す (Kaplan 141-42)。
- 6) “[Whitman] formed an intimate relationship with some woman of higher social rank than his own—a lady of the South where social rank is the first consideration—that she became the mother of his child, perhaps, in after years, of his children . . .” (Binns 51).
- 7) “It is said that, when as a young man he lived in New Orleans, he had fallen in love with a beautiful octoroon but had allowed his friends and relatives to break up the match. It is possible that the disappointment determined the pattern of his later rebellion in verse. Free verse was his great idea!” (Williams 23).
- 8) Miller は過去のロマンス神話を否定した上で、ホイットマンのロマンスの対象はアメリカ自身であった、アメリカとの間に生まれた子が『草の葉』

なのだと比喩的に述べる (Miller 22)。

- 9) 「同性愛」 (homosexuality) という言葉が19世紀中葉には存在しなかった事を考慮する必要がある。OED の最初の用例は1892年 (ホイットマンの没年)。
- 10) Helms 及び Parker を参照。前者では12編全て引用されている。
- 11) アフリカ系アメリカ人とエイズ問題を取り上げた新たな章 “The Future is Here” が加わり、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes) 以下 7 人の詩人が引用されている (Martin 261–79)。
- 12) 海野弘は、同性愛を広く人間の本質と絡めて論じている。「人と人がいかに結ばれるか、という〈友愛〉のテーマである。人はいかに他者と知り合うことができるのだろうか (海野 511)。」
- 13) 夏目漱石 104。
- 14) 江藤淳 403。
- 15) 「葉を出す」と「詩を書く」の同義について Zweig は [t]he poet-tree と述べ、詩人が実際に見たであろう木を推測している (Zweig 77)。
- 16) Matthiessen 555 に引用。
- 17) 初版出版に際し名前を変えた事情については Cowley を参照。
- 18) Lewis は大木に詩人の理想像と同時に、空間に立つ孤独な英雄像を見る (Lewis 48–49)。
- 19) “a kelson of the creation is love” という「私自身の歌」第5節の言葉を含め、論者は「棟木」という表現を用いた。
- 20) “None of the poets have touched exactly what I wanted to do. It seemed to me that all had fallen short of getting down deep into the appreciation and sympathies of the mass of mankind. Of course, in a brief conversation I can only suggest what I mean. Shakespeare’s poems of war and passion, Milton’s allegories and the poetry of men like Tennyson and Longfellow—in fact, all the poetry I had ever read, seemed to fall far short of touching the people of the world in their very cores of understanding and desire” (Traubel 368–9)。

参考文献

- Allen, Gay Wilson. *The Solitary Singer*. New York: Macmillan, 1955.
- Binns, Henry Bryan. *A Life of Walt Whitman*. London: Methuen, 1905.
- Bowers, Fredson, ed. *Whitman’s Manuscripts: “Leaves of Grass” (1860): A parallel Text*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Cowley, Malcolm. “Introduction” in: Malcolm Cowley ed. *Leaves of Grass (The First Edition)*. New York: Viking, 1959. vii–xxxvii.

- Helms, Alan. "Whitman's 'Live Oak with Moss'" in: Robert K. Martin ed. *The Continuing Presence of Walt Whitman: The Life after the Life*. Iowa: U of Iowa P, 1992. 185–205.
- Kaplan, Justin. *Walt Whitman: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1980.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam*. Chicago: U of Chicago P, 1955.
- Martin, Robert K. *The Homosexual Tradition in American Poetry (An Expanded Edition)*. Iowa: U of Iowa P, 1998.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance*. New York: Oxford UP, 1941.
- Miller, Jr. James E. *Walt Whitman*. New Haven: College and University Press, 1962.
- Parker, Hershel. "The Real 'Live Oak with Moss': Straight Talk about Whitman's 'Gay Manifest'" *Nineteenth-Century Literature* 51 (1996): 145–60.
- Reynolds, David S. *Walt Whitman's America: A Cultural Biography*. New York: Alfred A. Knopf, 1995.
- Traubel, Horace. *With Walt Whitman in Camden* (vol. 2). New York: Rowman and Littlefield, 1961.
- Whitman, Walt (Floyd Stovall ed.). *The Collected Writings of Walt Whitman, Prose Works 1892* (vol. 2). New York: New York UP, 1964.
- (Michael Moon ed.). *Leaves of Grass and Other Writings*. New York: W. W. Norton & Company, 2002.
- Williams, W. C. "An Essay on *Leaves of Grass*" in: Milton Hindus ed. *Leaves of Grass: One Hundred Years After*. Stanford: Stanford UP, 1955. 22–31.
- Zweig, Paul. *The Making of the Poet*. Middlesex: Penguin Books, 1986.
- 海野弘『ホモセクシャルの世界史』東京：文藝春秋、2005。
- 江藤淳『決定版 夏目漱石』東京：新潮社、1979。
- 夏目漱石「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」『漱石全集』第12巻（初期の文章及詩歌俳句）東京：岩波書店、1967。93–109。

付記

本稿は、日本ホイットマン協会第43回大会（2005年10月22日、於京都大学）における口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。後日、鈴木保昭氏より「ホイットマン “櫂の木の歌” 私考」（『立正大学大学院紀要』第5号（平成元年2月））を送付された。感謝の意を表したい。

Manly Love as the American Poet and/or as a Man:
Walt Whitman “I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing”

OZAWA, Kazumitsu

“I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing” is a lyrical short poem by Whitman. His “manly love” is a clue in catching the message of *Leaves of Grass*. I would like to discuss the wide range of “manly love” since recent critics have argued Whitman’s homosexuality.

Whitman projects his ideal image on a live-oak growing in a wide flat space in Louisiana. Three adjectives applied to the tree, “rude, unbending, lusty” remind me of “Walt Whitman” representing the ideal of Democracy as the American poet.

However, Whitman says that he could not “utter joyous leaves,” “without a friend a lover near.” The poet plucks a twig from the tree and he thinks of “manly love” in his room distanced from Louisiana. Whitman changes his tone.

This paper is an attempt to consider Whitman’s contradiction. His “manly love” is a desire as well as the ideal.

(人文科学研究科イギリス文学専攻 博士後期課程3年)